

## 見えない差別と職業選択

Erik Plug, Dinand Webbink, and Nick Martin (2014) "Sexual Orientation, Prejudice, and Segregation," *Journal of Labor Economics*, vol.32, no.1, 123-159.

一橋大学大学院 孫 亜文

### 1 はじめに

Becker (1957)によれば、労働市場において、差別嗜好は個人の職業選択や所得に影響する。人々が職業を決定するとき、そこには能力による選別とともに外的内的差別による選別があるだろう。差別によって能力未満の所得を得ることは、個人の生涯所得を減少させてしまう。このような差別による経済効果を考慮した研究は多くなされており、特に人種差別や性的差別に焦点を当てた研究が多い。

一口に差別と言ってもさまざまなものがあるだろう。人種や性別のように可視的な差別もあれば、個人的嗜好のように目に見えない差別もある。このような目に見えない差別は、その計測も分析も一段と難しくなってくると考えられる。

今回紹介する論文は、目に見えない差別の一つ性的嗜好への偏見と職業選択についての分析である。この論文では、オーストラリアの双子データを用いて、性的嗜好への差別が同性愛者（ゲイ、レズビアン）の職業選択にどのような影響を及ぼすのかを分析している。

### 2 性的嗜好への偏見と職業選択

労働市場における差別は、必ずしも一方的に起こっているわけではない。Becker(1957)では、4つの面(雇用する側、雇用される側、消費者と政府、市場)からの差別を議論しており、同じ能力を持った労働者が差別によってどのような異なる扱いを受けるのかを定式化している。これに従うと、性的嗜好への差別の場合、短期的には偏見によって職業分離が起こり、同性愛者と比べて同性愛者の収入は最終的に減ると考えられる。もし性的嗜好の違いに関わらず人々の労働生産性が同じであった場合、性的嗜好に偏見のない雇用者は、異性愛者と同性愛者を同時に雇用することにリスクを感じるだろう。そのため必然的に同性愛者の職業

分離が起こる。長期的には、偏見を持つ労働者は最終的に労働市場からいなくなるという見解もあれば、存在し続けるという議論もあり、確固たる結論はない。

性的嗜好への偏見・差別を検証するために、先行研究ではさまざまな分析が行われてきた。男性については、Beckerの差別理論の通り同性愛者の方が異性愛者よりも所得が低いとする研究がある。一方で、女性に関しては、Beckerの差別理論とは反対に同性愛者の方が異性愛者よりも所得が高くなる研究もある。また、仕事の種類を比較した研究では、男性同性愛者はより低ランクで女性的な仕事に就きやすく、女性同性愛者は高ランクな仕事に就きやすい結果を示す研究もある。

これらの先行研究に対して本論文では4つの懸念事項を挙げている。1つ目は職業選択を決定する要因が、性的嗜好へも影響を及ぼす観測できない個人属性である可能性であり、2つ目は差別理論が差別行動の計測自体を考慮していない点である。例えば、男性異性愛者は女性よりも男性の同性愛者に嫌悪感を持つ場合、その影響は変わるだろう。3つ目として、誰もが個人の性的嗜好を公にしていない点である。性的嗜好のように一般的に偏見が存在する嗜好等では、周りからの負の影響を考慮してカミングアウトする人が少ない。4つ目に、職業の分離のみに着目している点である。同じ職種でも偏見の少ない職場を選択する人もいると考えられ、偏見による影響の解釈が変わるだろう。この論文では、これら懸念点に対処するためにオーストラリアの双子データを用いている。

### 3 データとモデル

この論文で用いられているデータ (Australian National Health and Medical Research Council Twin Registry) は、1988年と1990年に双子を対象に行われたクロスセクションデータである。このデータには、同性愛についての考え方や自分自身の性的嗜好に関す

る質問項目が含まれている。また、異なる性的嗜好を持つ双子ペアも含まれているため、このデータを用いることで偏見による職業選択の影響をより精確に分析できる。さらに、片方の双子によるもう片方の性的嗜好への回答もあり、両方（自身ともう片方の双子）の回答を比べることで、職場でのカミングアウトの影響や職業選択との関係を分析することが可能となる。

モデルは以下の通りである。

$$F_{ijk}^D = \alpha_1 H_{ij} + \beta_1 X_{ij} + \gamma_1 U_{ij} + \epsilon_{ijk} \quad (1)$$

ここで、 $F^D$ は職種ごとの全体に占める偏見を持つ異性愛者率であり、 $H$ は回答者の性的嗜好を表し、 $X$ と $U$ はそれぞれ観測される個人属性と観測されない個人属性を示す。 $\epsilon$ は誤差項である。添字 $ijk$ は、職業 $k$ に就いている家族 $j$ に生まれた個人 $i$ を表している。もし双子が一卵双生児であった場合、性的嗜好の係数 $\alpha_1$ はより精確に求められる。本論文では(1)式についてOLS推定と双子間のFE推定を行っている。

#### 4 結果と議論

用いられたサンプルでは、異性愛者の双子のうち75%が同性愛者に対して偏見を持っていることがわかった。性的嗜好に最も寛容な職種は専門職（図書館員、芸術家、開業医、教師など）であり、その割合は50%程度であった。一方で、性的嗜好に最も嫌悪感を示す職種は現業職（大工、自動車整備師、庭師など）であり、その割合は95%以上となった。これらと合わせて職種別の同性愛者率をみると、同性愛者はより寛容な職に就きやすいことがわかった。しかし、これは偏見による職業分離が起こっていることを表しているわけではない。

OLS推定と双子のFE推定の結果によれば、同性愛者の方が異性愛者よりも周りに偏見を持つ同僚が3～9%ポイント少ないことがわかった。これは同性愛者が、偏見を持つ同僚が少ない職を選択している可能性を示唆している。この結果は決して大きなものではないが、無視できるほど小さなものでもなく、同性愛者が職場で自分の性的嗜好を公にするかという点で意味ある結果を示していると言えよう。また、この論文では頑健性の確認として近年のパネルデータ（双子ではない）を用いて同様の分析を行い、同じような結果を得ている。つまり、雇用者と労働者の性的嗜好への偏見は、同性愛者の職業選択へ影響を与えるとして理解で

き、Becker (1957) の差別理論と整合的であると言えよう。しかし、この論文でも述べている通り、因果関係の解釈には慎重となる必要がある。例えば、双子のFE推定に対する頑健性の確認として行われた分析では、異なる性的嗜好を持つ双子のうち同性愛者の方が異性愛者よりも学歴が高いことを示している。すなわち偏見による職業分離は、将来を見据えた同性愛者自身の行動の結果として起こっているとも考えられ、因果関係の解釈には留意する必要がある。

もし性的嗜好が異なる双子が、その他の個人属性においても異なる場合、同性愛者の職業選択は性的嗜好への偏見によるものとは限らなくなり、また同性愛者については他にも子供を持つことや居住場所等も職業選択の決定要因となるため、さらなるメカニズム説明がこれからの展望であるとまとめられている。

#### 5 まとめ

本論文では、オーストラリアの双子データを用いて、差別理論に基づき同性愛者が偏見を持つ異性愛者とは異なる職業を選択するのかを検証している。その結果、同性愛者は偏見を持つ異性愛者同僚がより少ない職業に就いている割合が高いことがわかった。しかし、それは偏見や差別が同性愛者の職業選択に影響を与えていると断言できるものではなく、差別と職業選択のさらなる因果関係解明が期待される。

日本では、職場における同性愛者の存在は欧米諸国と比べてそこまで表面化していない。そのため、この論文で取り上げている差別トピックはあまり身近な話題とは思えないだろう。しかし、マジョリティとマイノリティが存在するところには差別は必ず起こるものであり、労働市場において差別嗜好がもたらす影響も少なくない。また、原爆による被爆差別や東日本大震災による震災差別・原発差別といった目に見えない差別もあるだろう。本論文は、日本における差別がどのような経済効果を及ぼすのかを分析する上で、意義ある示唆を与える内容である。

#### 参考文献

Becker, Gary S. (1957) *The Economics of Discrimination*. Chicago: University of Chicago Press.

そん・あもん 一橋大学大学院経済学研究科博士後期課程。労働経済学専攻。

文中の記述に誤りがありました。下記のとおり訂正いたします。  
(誤)性的嗜好 (正)性的指向